

Title	「北光社」と「聖園農園」の運命とボランティア・アソシエーション
Author(s)	深井, 智朗
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume18, 2003.2 : 200-211
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3216
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「北光社」と「聖園農園」の運命と

ボランティア・アソシエーション

深井智朗

ご紹介いただきました深井でございます。私が果して皆様のお役に立つようなお話ができるのかどうか私自身疑問に思っておりますが、それにもかかわらずこのお話しをお引き受けしましたのには二つの理由があります。ひとつは皆さんの活動が、日本にいる外国人子女へのさまざまな支援活動であるということをお話したのであります。しかもこの活動がさいたま市近辺の超教派のキリスト者の活動でもあるとうかがい、興味も持ちましたし、嬉しくもなりました。私は四年程家族と一緒にドイツで暮らしたのですが、その時多くの人々の助けを得ました。特に二歳から六歳までの大切な時期をドイツで過ごした長男のことでは、多くの助けを頂きました。個人的な助けもありましたが、NGO・NPO、そして特にキリスト教会等の組織的な助けもいただきました。私はそのことにいつも感謝しておりました。今回かつての教会青年会時代の友人たちが中心になって、日本にも同じような組織を立ち上げられたということを知り、いくら何でもお役に立つことがあれば、と考えました。

もうひとつの理由は、先程ご紹介いただきましたように、私は以前は与野市と言っておりましたが、さいたま市に住んでいたことがありまして、この会の事務局をしておられる布川君は私の古くからの知り合い、同級生であります。彼から昨年の暮れになって突然電話をもらいました。「きみは中学生の頃ずいぶんとわがままなことを言っ

てぼくたち友人を困らせた。それで今その罪滅ぼしをする気はないか。」そう言われたのです。寝耳に水とはこのことでありまして、私たちはどちらかと言えば布川君の自由奔放な行動にいつでも驚くばかりではなく、困らされておりましたので、そういう根柢のない噂がわが愛するさいたま市に広まらないように、今日はそのことを否定するためにもぜひうかがわねばならないと思いました。

さて今日のお話ですが、皆さんの活動について、私が日頃研究しておりますプロテスタンティズム論の観点からいくらかのことを述べさせていただこうと思っております。皆さんの活動は、国家や政府から区別される、いわば「自発的結社」の活動であると思います。英語ではそれを「ボランティア・アソシエーション」と言います。この集まりは強制ではないわけですし、利益を得るための団体でもないわけです。むしろみんなが資金を出し合い、また協力し合って、この活動を進めているわけです。布川君も無給の事務局長です。こういう「自発的結社」の起源とプロテスタンティズムの歴史は深く関わっています。ですからプロテスタンティズムの歴史を少し勉強してみますと皆さんの活動の助けになるような知恵が出てくると思うのです。今日はその知恵について少しお話してみたいと思います。あまり抽象的な話をしても仕方がないと思いますので、日本での具体的な例をあげてお話してみたいと思います。

一、自由民権運動と高知のプロテスタント教会

皆さんは明治時代の自由民権運動についてはどこかで読んだり聞いたりなさっているとと思います。私の家には今受験生がおりまして、年号や年表を暗記したりしておりますが、自由民権運動と言えば板垣退助ということになっ

ていると思います。しかし自由民権運動の基盤であった自由党は、政府の弾圧が厳しくなり一八八四年には解党させられております。そして板垣をはじめ自由党の幹部は失意のうちに高知へと戻ってきました。

ここまでは歴史の教科書に出ております。しかしその先の話は教科書には出ておりませんが、日本のプロテスタント教会の歴史にとっては重要な出来事なのです。ちょうどこの頃高知で新しい動きが始まっていたのです。板垣たちが高知へ戻ったちょうどその年、プロテスタントの宣教師たちによる高知への伝道活動が開始されたのでした。そして翌年一八八五年に高知教会が設立されました。そしてこの年は、内閣制度に基づく政治体制ができあがった年でもありました。

この高知教会には、自由民権運動の活動家たちが出入りするようになりました。板垣は彼自身がキリスト者になるということはありませんでしたが、高知教会の活動に理解を示しておりました。しかしこの教会の会員たちの中からたとえば最初の衆議院議長になった片岡健吉のような代議士が出ましたし、また武市安哉も第二回の総選挙の際に当選しております。さらに坂本直寛（坂本竜馬の甥）や細川義昌、安藝喜代香などの自由党员で、この地方の政治的な指導者がおりました。高知教会は日本の地方都市の教会としては稀に見る成功を勝ち取った教会で、創立数年にして早くも三百人の礼拝出席をはこる教会に成長しました。戦争前の昭和一〇年あたりでは三九〇人近くになっています。

教会ができました一八八五年は、先ほど申しましたように内閣制度が発足した年でありまして、伊藤博文が最初の内閣総理大臣となった年でもあります。それからの数年間は日本の激動の時代でありまして、新しい制度への移行は混乱を生み出しただけではなく、人々の生活の困窮をも生み出したわけです。特に地方の農民たちの困窮状態はもはや放置しておけない状態となっておりました。また自由民権運動以来の言論や結社の自由の要求の高まり、

さらに不平等条約改正に関する失策への責任追及など、伊藤内閣への批判は高まるばかりでした。それで各地から建白書をもって上京する人々が出始め、高知からは先ほどの片岡健吉、武市安哉、坂本直寛、細川義昌、安藝喜代香が郷土総代として建白書を持って上京することになりました。それは一八八七年のことでした。教会はこれらの人々を送り出すための祈りの会をいたしまして、涙ながらに送り出したということが『高知教会百年史』（一九〇五年）に記録されており、

ところが東京に行きますと突然保安条例が出されました。それは集会の禁止などと合わせて治安を乱すものは皇居の三里以内に滞在してはならないという内容のもので、具体的には高知の自由民権運動家たちの取り締まりを想定したものでありました。そして先の五名は逮捕され、石川島監獄に収監されてしまいました。彼らは翌年大日本国帝国憲法の発布の恩赦によって出獄するまで、そこから多くの手紙を書きました。それが今でも残っておりまして、キリスト者となった彼らの真髓が伝わってくるような手紙です。

その後片岡健吉と武市安哉は代議士になりますが、この国の新しい建設には、制度も大切だが、精神の改革が必ずやだということを考えるようになった経過が先の手紙から読み取ることができます。事実武市安哉は、代議士になってもなく、その職を辞して、新しい事業を起こすことになりました。それが北海道殖民事業でありました。

二、聖園農園と北光社

武市安哉は一八九二年の第二回国民選挙によって代議士となりましたが、実質的には一ヶ月ほどその立場にあっていただけでした。彼はせっかく自分を選んでくれた選挙民たちに可能なかぎりお詫びをした上で、その職を辞したの

でした。彼は政治に失望したと言つてよいでありましょう。彼はこういうふう書いております。「此の際頻りに感じけらく、元來政弊を改革し、以て民庶に眞の安堵を得ざせんこと、実に余が此地位に立ちたる素願なりき。然るに之を達んとする手段に於て却て種々の政弊を伴う、豈遺憾ならずや。余にして若し名を銜ひ、榮を貧らんがため、將たまた職業となさんがために此地位に立てるならんには兎に角、そは痛く素志にもとる。余には是非共到達すべき標的あり。いづくんぞ途上に紛争を惟れ事とし、以て千金の日々を徒費するに忍びんや。」彼の理想は、政治の力による國家の建設でも、社會の改良でもありませんでした。彼は今必要なことは人間の改革に基づいた社會の形成ということでありました。

彼はそのような仕方で議員を辭職するわけですが、それと前後して、自由黨から北海道の開拓用地拡大のための調査員に任命されて、北海道の視察に出かけておりました。彼は北海道の自然と雄大さに圧倒され、ここにキリスト教精神に基づく理想の殖民地を建設して、土佐の農民たちの窮状を救いたいと考えたのでした。彼は北海道の権戸郡月形村の浦臼内に一八九万坪の土地を貰うけ、殖民事業を開始しました。

当時北海道開拓は新しく生まれました政府の政策でもあり、国や地方政府主体の殖民事業は盛んでありました。屯田兵という言葉も歴史の教科書に出てきます。しかし武市安戩の計画は、それとは違つておりました。彼の計画は政府の政策の一環として、この事業を行うのではなく、事業主体としての「高知殖民會」を作り、この主旨に賛成する出資者を募り、さらにこの精神に賛成する人々を集め、かの地にキリスト教的な農村を建設することでありました。そこに参加するものは、これまでの繋がりではなくて、契約によつて、この事業に参加することになったのです。それは日本における「自発的な結社」のさきがけと言つてよいかも知れません。それは地縁血縁に基づくものではない、いわば精神的な共同体でした。

そのために彼は「高知殖民会規則」を作り、伝統的な職業観や制度を廃して、日曜日と祝祭日を休日とする新しい労働制度、殖民三年間は酒類の販売の禁止と、全ての者が禁酒することというピューリタンの倫理観、全ての農民が最初は土地を貸与され、開墾事業完成後は自らがその所有者になることができることなどを定めたのでした。このようにして出来上がったのが「聖園農場」で、それはまるでアメリカのピューリタン時代の計画のようでした。その農園の中心には日本基督教会聖園講義所が設立され、理想的なキリスト教農村共同体の建設を求めて、三一名の入植者が高知を後にしたのでした。それは一八九三年七月のことでありました。

さてこの武市安哉の殖民事業から六年後のことでした。同じ高知教会の坂本直寛（先ほど申しましたように彼は坂本竜馬の甥にあたります）が、やはり北海道殖民事業を開始することになりました。それは武市安哉よりもさらに自覚的な事業であり、キリスト教精神に基くものでした。彼の「予が信仰之経歴」という文章を読みますとそのことが明らかです。彼は旧約聖書に出てきますイスラエル民族の出エジプトの出来事、つまりイスラエルがエジプトのファラオの支配から解放されて、新しい約束の地を与えられたこと、またイギリスのピューリタンたちが、国王の迫害を逃れてアメリカに新しい地を与えられたことと同じことを、今この日本で行うと考えたわけです。

一八九七年に植村正久主筆の『福音新報』に「北海道に拓殖事業を興さんとする意見」という文章を投稿しまして、その中で「小生は伝道と教育を以つて将来聖村を建設する考へに有之候」と書いております。そしてそれは北海道に「潔き義に生きる神の国を建設する」ためであるということです。繰り返すようですが、それは言ってみれば新しい共同体を作り出すための努力でありました。国の力によるのではなく、地縁・血縁によるのではない、理想と精神とによって、あるいはひとつの共同目的によって作られた共同体でありました。

三、ボランティア・アソシエーションの原型としてのプロテスタントイイズム

この明治時代の高知教会のサンプルのことを考えますときに二つのことを思い起こすべきではないかと思ひます。ひとつはこの殖民事業と最近流行の「市民社会論」や「ボランティア・アソシエーション」との関係です。もうひとつは高知教会の人々はどこからこのようなアイデアを得たのか、ということですが、

最初の点ですが、J・ハーバースは「市民社会」について次のように述べています。「市民社会」とは「市民社会の制度的な核心をなすのは、自由な意志にもとづく、非国家的・非経済的な結合関係ということである。もっぱら順不同にいくかの例をあげれば、教会、文化的なサークル、学術団体をはじめとして、独立したメディア、スポーツ団体、レクリエーション団体、弁論クラブ、市民フォーラム、市民運動があり、さらに同業組合、政党、労働組合、オルタナティブな施設にまで及ぶ」。この定義でハーバースが考えているのは、市民社会というのは、国家という支配装置に対して「体制批判のカテゴリーとして有効性を持つ」概念であり、それは旧社会主義国で「全体主義」批判と抵抗の理論装置となり、革命の原動力となっただけではなく、西欧デモクラシー国家に対して、制度化したマスメディアの「公共性」支配と一般市民の没公共的・他存的「クライアント化」、すなわち福祉国家的なクラティアンティズムという今日のデモクラシーの危機に対する批判的な視点を提示するものだと思います。

もちろんこのハーバースの定義が完全なものだとは思いませんし、彼もそのようには考えていないと思ひますが、とりあえず、「市民社会」や「ボランティア・アソシエーション」という場合には参照すべき定義であると思

います。すなわちそれが「自由な意志（ボランティアなもの）」に基づく、「非国家的・非経済的」結社だということです。その点ではマイケル・ウォルツァーが彼の「市民社会論」の中で「非強制的な人間のアソシエーションの空間、また、この空間を満たす（家族、信仰、利害、イデオロギーのために形成された）関係的ネットワークの総称」と定義していることも参考になります。

私たちはこれまでの習慣で「社会」ということですが、「国家」のことを考えてしまっわけですが、「社会」とは「国家」のことではありません。それはNGOの活動をしておられる皆さんはよくご存知のことであると思いません。そういうことが一般的に言われるようになり、認識されるようになったのはごく最近のことです。

ところで高知教会のキリスト者たちの試みはそれを先取りしているような行動でした。彼らは自由民権運動の影響を受けていたからかも知れませんが、はじめから政府に頼ろうという考えはなく、また国家のお墨付きをもらって仕事をしようというようなことも考えておりませんでした。彼らはむしろそういうものと対立してでも、自分たちの信じることに従ってこの事業を成し遂げようとしたのであります。事実この時代、他にも北海道の開拓、殖民事業はあったのです。そういう意味ではこの高知教会の事業は最近のNGOの仕事と申しますか、ボランティア・アソシエーションの日本における先駆け的なものであったと言えないでしょうか。

もうひとつの点、すなわち高知教会の人々がどこからこのようなアイデアを得たのかということですが、私はそれは自らの伝統である、プロテスタントイイズムの歴史からではないかと思っています。

坂本直寛が自らの殖民事業の模範を一七世紀のピューリタンに見出そうとしていることはその証左のひとつでありましょう。アメリカに移住したピューリタンたちの教会というのは、今日のボランティア・アソシエーション、あるいはNGOやNPOのモデルといってよいと思うのです。

私はアメリカに渡ったピューリタンたちの教会を「自由教会」と呼んでいます。何に対して自由教会なのかといいますと、当時のイギリスには、国教会という制度がありました。国家の統治機構の中に組み込まれた教会です。教会税というのを集めておりまして、行政区と教会の教区とが重なり合っております。ある行政区に学校と警察と消防署とがひとつづつあるのと同じように、教会もあります。現在でもその制度を続けているところがありますが、戸籍を教会が管理しているのです。子供が生まれますと幼児洗礼を受け、成長しますと教会で結婚式をし、年をとって亡くなると教会で葬儀をし、教会墓地に埋葬されるわけです。それで戸籍は教会が管理するのが一番現実的なのです。現在では国教会が残っている国でもそこから離脱することはできませんが、一七世紀はそうではありませんでした。ピューリタンたちは危険を冒して、信じる自由を求めてこの国教会から離脱して、アメリカに信じる自由が保障された新しい社会を作ろうとしたのです。

この国教会と自由教会とで何が違うかと申しますと、簡単に言えば、国教会は教会の運営を税金でまかなっており、自由教会は自発的な献金でまかなっているということです。また国教会では、あの地域に生まれたら、その地域の教会に行かねばならないわけですが、自由教会は自発的に、自らの意志によってその教会に加入するということとなります。一七世紀にこの二つの教会のタイプが現われ出たのでした。国教会は国がつぶれるまではつぶれることなく、存続し続けるでしょう。しかし自由教会は自発的な結社ですから、その教会を形成するという意志を人々が失ったり、その目的を失ったりしますとなくなってしまうです。ピューリタンの教会は、そういう意味で近代の自発的結社、ボランティア・アソシエーションの原型だと思っています。そういう意味で、高知教会のあの事業、すなわち北海道の殖民事業というのは、このピューリタンの教会からアイデアをとったものであると思います。

四、聖園農園と「北光社」の運命

さて、このようにして作られた二つの北海道殖民事業ですが、しばらくの理想追求の良き時期を過ぎて、いつの間にか理想的なキリスト教的な農村を作りということやかの地に神の国を建設したい、というような精神的共同体としての面はなくなつて行き、結局は農園経営だけが残り、あの志ある新しい共同体は消滅してしまいました。それはひとつには武市安哉の早すぎる死と、坂本直寛の臼浦への移住などさまざまな理由が考えられますが、理想的な共同体を作り上げることの難しさを考えさせられます。またボランティア・アソシエーションの運営の難しさを思わされる出来事です。これらの集まりは自発的な結社ですから、精神的な担い手がいなくなりますと、簡単に消滅したり、最初の意図と異なった団体に変容したりします。どんなに素晴らしい理想と事業内容があつたとしても、それだけでは自発的な結社は成り立ちません。いわゆる官僚的な組織であるならば、逆にどんな人でありましても、組織としての機構が整っていれば、その団体は継続されて行きます。この二つの殖民事業にはこのようなボランティア・アソシエーションを形成して行く上での難しさが典型的に現われていると思います。私の推測であります。この難しさはみなさんもこのような団体を形成し、運営して行く上で感じておられる苦勞なのではないでしょうか。

私はこの二つの事業が結局は二つの教会、すなわち聖園教会と北見教会とを生み出し、しかし最初の遠大な理想を実現できなかったことは、NGOやNPOの仕事をなさる方々が、歴史の教訓として学ぶべきことではないかと思つてゐるのです。時間もあまりありませんので、ひとつだけ申し上げたいと思います。それは、歴史の中に完成

はないということです。歴史の中に神の国を建設しようとするあらゆる試みはそのような意味で挫折するのではないのでしょうか。

私は先程、自発的結社のモデルとして一七世紀のピューリタンの例をあげましたが、もうひとつ典型的な例をあげるとすれば、それは原始キリスト教会であると思います。みなさんご存知の使徒行伝に原始キリスト教会の素朴な共産制が出てきます。当時のキリスト教は、ローマ帝国から公認されているわけでもなく、ユダヤ教の一派というわけでもなく、まさに神の国を待ち望む自発的な結社でした。そこで財産を持つものたちも、財産をもたないものたちも共に助け合つて、神の国を待ち望むために、この教会に加入する際には自分の財産を処分して、それを教会に寄贈するという規則をつくるわけです。しかしそれは自主申告です。自発的な行為です。この制度はしばらくはうまく機能しているように見えました。ところがこの約束はそれをごまかして申請した人の裏切りによつて破壊されてしまったのです。実はこの裏切りは、財産を処分して全部を捧げたと申告したことにありました。自発的な行為が原則ですから、それをしてもしなくてもよかつたのです。それにもかかわらず、この夫婦は不正の申告をし、それによつてこの制度は急速に崩壊に向かうのです。それは自発性のもうひとつの側面である自由の問題と関係しているのです。

この世の中に、歴史の中に完全を求めても、それは挫折に終わるだけでありましょう。それは人間の持つ自由が創造性とともな破壊性をも持っているからです。また経験的に言つても完全さを求める集団は、イエスが教えてくださったような毒麦と良い麦とが混在している中間時の現実を無視して、神による最後の審判によるのではなく、自分が判断の基準になつて完璧さをもとめるがために、不純と思えるものを排除したりしますので、神ならぬものが神になるという誤りが生じるのです。教会が神の国に限りなく近づくことは可能なのですが、教会が神の国

になることはできないように、この歴史の内部に完全はないのです。この現実には耐えることはあらゆる自発的結社の運営に必要な知恵であると思います。

そしてこの歴史的な事実が示す励ましもあります。それはこの事業が理想の実現には至りませんでした。また初期の形態は失われましたが、それぞれの場所に教会が残ったということです。この事実は、ボランティア・アソシエーションということを考えますときに、歴史の中にある可能性として教会以上のボランティアな共同体は不可能なのではないかということをおぼろげに思わされるのです。ですから皆さんの活動がその精神的な母体である教会を離れることなく、絶えずその中にある知恵を参照するものであつて欲しいと思つておられるのです。

私の用意してきましたお話しは以上であります。ご清聴ありがとうございました。

(二〇〇二年一月一四日に「日本で暮らす外国人子女の教育を共に考える会」での講演)